立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１３年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　比較文明学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・比較文明学専攻・博士前期課程２年	佐藤裕亮　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	立教大学文学研究科比較文明専攻・助教 A	片上平二郎　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	メディア技術における「幽霊」について		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	立教大学文学研究科・比較文明学専攻・博士前期課程２年	佐藤裕亮	
研究期間	２０１３　年度		
研究経費	（支出金額）　１９８千円　／（採択金額）　２００千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、メディア論と文学・映画作品、そしてフランス現代思想という３つの学問領域を「メディア技術」と「幽霊」という言葉で接合し、メディア技術が人間のあり方にどのように関わっているのかを考察するものである。具体的に言えば、江戸川乱歩の随筆、ロラン・バルト、ポール・ヴィリリオといったフランス現代思想家たちの技術論などを参照することで、メディア技術への理解をより深めるものである。文学的想像力や思想家のテクストの読解を通して、メディア技術を日常的な見方から開放し、より多角的かつ広い視点を得ることを目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　文化研究　〕〔　メディア論　〕〔　フランス現代思想　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、先の研究概要にもあるように、「幽霊」という言葉を軸にしながら、メディア論と文学、フランス現代思想という３つの学問領域を横断的に研究することで、メディア技術の理解に関する新しい視座を獲得することを目指す研究である。この研究には、メディア技術の日常的な実践についての実証的な研究を行うと同時に、メディア技術に関する存在論、あるいは唯物論とも言うべき抽象的な理論を構築する必要がある。

その目的達成のために、当初は以下のような研究内容を想定した。

① 「メディア論」の批判的検討（理論研究、実証的研究どちらも含む）
② フランス現代思想の従来的理解と批判的再構成、及び「幽霊」という語彙の用法の検討
③ 文学作品、映画作品における「幽霊」表象の分析
④ 上記①～③の統合と、本研究のまとめ

まず2013年度（以下、「本年度」）は①に関連し、日本国内における「メディア論」の歴史の振り返りを行った。

「メディア論」は、語源的には、マーシャル・マクルーハンの『Understanding Media: The Extensions of Man』(McGraw-Hill,1964)を、栗原裕・河本仲聖が『メディア論――人間拡張の諸相』（みすず書房、1987年）と翻訳することにより生まれた研究分野だと言うことができる。1つの著作が1つの研究分野を生んだ原因は、マクルーハンの著作にあった「メディアはメッセージである」というテーゼの与えた衝撃の大きさである。つまり、メディア技術が独特の効果を持つ、言い換えれば、メディア技術が「物質性」を持つという発想は、メディア技術をコミュニケーションの透明な媒体と見なす常識をくつがえす面白さがあったのだ。

さて、本年度は、日本におけるメディア研究の先駆けであり、常に刺激的な視点を提供し続けてきた長谷正人と、その影響下にある北田暁大の研究を基にしながら、日本国内における「メディア論」の歴史を振り返ることで、「テクスト論」へのアンチテーゼ的学問領域としてメディア論が成熟／硬直化していく様子と、それを批判し、メディア論を更新していく試みを見ていった。

以上のような検討を通して、報告者自身の研究態度が明確になったと言える。すなわち、メディア技術について考える際に必要なのは、単に(a)コミュニケーションが常にすでにメディア技術に影響されているということを明らかにするだけではなく、(b)メディアを研究する者自身もそうしたメディア技術の「物質性」の影響下にいるということを自覚するという、自己言及的な研究態度なのである。こうした研究態度はメディア技術と人間との関係について考察する本研究においては不可欠なものだ。なぜなら、こうしたメディア技術の「物質性」を自覚する視点のなかでのみ、メディア技術と人間の日常的な見方を批判的に眺めることができるからである。メディア技術の物質性を自覚することは、それを歴史の中に置くことを意味する。メディア技術と人間との「歴史性」を自覚すること、つまり、それらの織りなす関係が、必然などではなく、人びとが実際に生きていく中で重層的に決定されてきた歴史的な産物なのだということを自覚するなかで、両者の関係の「別の可能性」を探求することができるのである。日本国内におけるメディア論の検討を通して得られた以上のような視座は、今後の研究を進めていくうえでの原点となるだろう。

フランス現代思想において頻繁に用いられる「幽霊」という語彙は、多くの場合、メディア技術との関連において用いられる。それらを研究する②は、本研究における理論の構成を目指すものである。だが、難解な現代思想の読解には時間もかかることに加え、研究も膨大だ。そして、何よりも、ある思想家の１つの言葉、概念について検討するためには、その思想の全体像を把握することが必須である。そのため、本年度は思想家を絞り、特にロラン・バルトの思想、写真論について研究した。

バルトは写真について多くの言及を残しているが、その写真論は、特に「言語」との対照関係において把握される必要がある。暴力的に単純化して言えば、バルトにとって「言語」とは、写真や映画の映像、その他の記号の見方を意味論的に統御する装置である。そしてブレヒトの「異化効果」に影響を受けたバルトの記号論は、そうした「意味の硬直化＝神話作用」を暴露するための方法論だった。そしてバルトは当初、写真についても（広告写真という限定付きではあるが）そうしたイメージ分析を行っていた。

しかし、晩年のバルトにおいて写真は、映画や絵画などの映像とは一線を画する装置として示されることになる。「幽霊」という言葉は、バルトの晩年の写真論において見られる。それは写真一般が、(a)撮影された人物を「死者の再来＝幽霊」にしてしまうという文脈、そして(b)バルトの母の写真が「幽霊」のように、自己の存在を証明しようとバルトに取り憑く、という文脈の２つにおいて用いられている。この２つの文脈はそれぞれ微妙に異なっているが、写真について思考することは、バルトにとって「死者」について考えること、つまり「喪の作業」なのである。

研究成果の概要　つづき

だが、こうした「喪の作業」をそのままテーゼとして受け取ってはならない。バルトの写真論の特異な点は、何よりも、写真がそのようなコード化を拒否するものであること、つまり、常に見る者の解釈を逃げ去っていくものであるということを強調する、その過程にこそあるからだ。それは例えば、写真が「～ではない」という否定語で説明されること、バルトが最も心惹かれる「母の写真」がテクストの中に明示されないというトリックから伺える。バルトにとって写真について考えることは、(a)写真が撮影された者を「死者」にするということ＝「アウラの喪失」（ベンヤミン）と、(b)写真がそうした「死」をもたらすものだということ自体を人びとが忘れてしまうということ＝「『アウラの喪失』の喪失」（北田）の間で思考を巡らすこと、つまり、(a)と(b)の二つの喪の作業を引き受けて、かつそれに抗おうとする、第三の喪の作業なのである。

以上のようにして得られたバルトにおける「写真」と「幽霊」の関連は、メディア技術について考える際の重要な手がかりになるだろう。つまり、①で確認したようなメディア研究の態度の先駆者としてバルトを見なすことが、バルトの思想のポテンシャルを引き出すものであるということが確認できた。その結果として「メディア技術」について「幽霊」という抽象的であいまいな語句を通して考えることを、第三の「喪の作業」として位置づけることができたのは、①と②の重要な研究成果である。ここでの報告は素描にすぎないが、「メディア技術における幽霊」について考察する「喪の作業」は、今後の研究でより一層深めていきたい論点である。

続いて③の研究についてだが、②と同様、「幽霊」を扱う文学作品、映画作品も数多い。そのため本年度は、一方では、探偵小説のトリックについて視覚論的な観点から考察した随筆「透明の恐怖」等を残し、さらには電話や活動写真（映画）、鏡などのメディア技術についての偏愛的な随筆・小説を残した江戸川乱歩を、他方では、日本映画界において一貫して「過去への回帰」（喪の作業）と、「作り物としての映画への偏愛」を撮り続けてきた映画監督の大林宣彦について、それぞれの作品研究を行った。

両者はそれぞれ小説と映画というように表現形式は異なるものの、それぞれの表現媒体とテクノロジーへの言及が多い。そして、メディア技術の虚構性への自覚を持つという点も共通している。特に大林作品において見られる「喪の作業」というテーマと表現における実験性は、上述したバルトのような、理論と実践＝表現の融合点として、つまり１つの「思想」として構成する可能性があると思われる。

研究途上であるため、現状では断片的な言及しかできないが、彼らのように、自らの表現媒体やテクノロジーの虚構性＝歴史性を自覚したうえでその限界を探求するその姿勢とその作品は、本研究の重要な手がかりとなる。彼らの作品は、その自覚的な姿勢ゆえに、媒体が内容に浸透し、内容が媒体に浸透する。つまり彼らの作品は、内容分析とメディア分析を対立させることのない方法論を要求している。これはテクスト論とメディア論の結節点とも言うべき方法論である。そうした作品群の分析をしていくなかで、作品の分析がそのメディア技術の考察にもなる、メディア技術の「存在論」と言うべき視座を獲得することができるであろう。今後は作品分析という形で、本年度の研究成果をまとめ、公表していくことを予定している。

最後に④、つまり①～③のまとめについては、上記のようにそれぞれの研究自体が途上にあるために、抽象的な展望を述べるに留まるが、本年度の研究のなかで、重要な点が確認できたと思われる。すなわち、本研究の目指すべき位置は、現代思想、文化研究、メディア論という学問領域を横断していく中で、メディア技術の「存在論」を構築することである、と。

なお、報告者が本年度に提出した修士論文は、①のようなメディア論の１つとして、日本国内におけるアイドルファンの「語り」の変遷を研究したものである。具体的に言えば、1990 年代のアイドルファン、そして 2010 年代のアイドルファンを対象にしたルポルタージュを主な資料として読み解くことで、従来のファン研究でよく見られる「アイドルファン＝宗教の信者」といったアナロジーや、そうした研究における「真面目さ」を「遊び」という観点から相対化することを試みた。ただし、その修士論文は、実証的な側面を強調しようと資料の分析に拘泥するあまりに、一貫した理論的な視座の見出しにくいものとなってしまった。そうした意味でも、本年度の研究活動全体を通して、理論の検討の重要性を認識することになった。

今後は本年度の研究を通して得られた個別の成果をまとめ、発表していくと同時に、その中で自覚された問題点、課題についても検討していきながら、本研究の総合的な結論を出していきたいと考えている。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

特になし。